

王統照《山雨》について

広野行雄

(I)

一九三一年八月の、ある日曜日の午後、上海にやってきたばかりの王統照は、文学研究会結成以来の友人であり、当時開明書店の編集者であった葉聖陶に、これから書こうとする二編の長編小説の構想を語った。そのうちの二編は、濟南事件に材をとって、ひとりの日本兵の心理の変化を書こうとするものであり、いま一編は、北方農村の崩壊現象と、その原因、及び農民の目覚めを描こうとするものであった。ところが、前者は、その執筆にかかった頃に、九・一八（柳条溝）事件が勃発し、翌年一月上海事変に発展するに及んで、情況の進み方に作品がついてゆけなくなり、ついに未完のままに放棄された。そこで一九三二年九月、今度は後者の筆を起し、三ヶ月余を費し十二月十二日に脱稿した。翌三年六月跋を付し、九月開明書店から出版する。これが《山雨》である^①。

ここで《山雨》の輪郭をつかんでおきたい。物語の前半

二〇章までは、「陳家村」という農地七十畝余り、人口二百人程の農村が、二三章以後は、「T島市（T市とも）」という都市が舞台となっている。作中の老人達が、ドイツ人の鉄道敷設の話をするなどから「T島市」は青島、「陳家村」は山東省の一農村、恐らくは作者の故郷である諸城県相州鎮のイメージが下敷きになっているものと思われる。時代は、一九三〇年を挟んだ二年ほどのことと推定される。主な登場人物は、一編の主人公である農民奚大有、彼の父奚二叔、村長陳大爺、その息子で野心家の葵園、みなし子で「阿Q」のような生活をしていたが後に村を飛出し軍人になる宋大傻、阿片のために廃人同様になった伯父徐秀才を養う徐利、「T島市」へ出て日本資本の繊維工場で働く杜烈とその妹杜英、共産党の活動家であるらしい祝先生等々である。作者は、もともと数人の人物を配して各自の物語の発展を企図していたようであるが、結果的には奚大有の生活の移り行きが全編を貫く経糸になっている。

そこで、以下大有の物語に絞ってその梗概を略述する。

奚二叔は、父祖伝来の土地に一生かけて数畝の農地を買い足し、今では十畝足らずではあるが村で一、二の自作農である。その息子大有は、「三十歳で、粗野ではあるが、田舎の人間の欠点を持っていなかった。彼は、十六、七の頃地方の師匠について拳法を学び、身体は壮健で、人から侮られることなどなかった。田畑の仕事をさせても、彼はいつも同じ年頃の若者を『奴らのごくつぶしだ』とからかっていた。確かに彼の、堅くしまった両腕と広い胸郭は、鋤き起しであれ、車押しであれ、他人にひけをとるようなことはけつしてなかった。だから人々は彼に仇名して大有ではなく『大力』と呼んでいる」(第三章)若者である。ところが、こともあろうにその誇り高い大有が、ある歳の暮、町へ野菜を売りに行った時、代金のことで兵隊といざこざを起し、殴られて怪我をし、その上談金まで払わされることになったのだ。現金をもたぬ農民の二叔は、陳大爺の友人で、町で商売をしている王から五十元の借金をしてそれにあてることにした。これが根っからの農民である大有を、その土地から引き離すことになる数々の天災人災の前ぶれであった。年が明けると県の教育局の委員をして、ある葵園がやってきて学校を建てるための資金の出資を村

人達に強要する。借金のためかなりの土地を処分しなければならなくなった二叔は、失意のうちに死ぬ。

夏になると今度は猛烈な日照りにみまわれ、その上雨乞いを土地廟で行っている最中に土匪が襲ってくる。武器をとって戦った大有は、足を撃たれる。土匪は、農民達自身の力によって退けたのだったが、軍隊が出勤してきたので、十数頭の豚と百斤以上の酒を出さなくてはならないのだった。秋になっても豆が三割ほど穫れたほかは、作物は全滅だった。しかし、税金は容赦なくとりたてられ、しかも共産軍討伐のための「討赤捐」なる税までとられる始末である。大有はまた土地を売らなければならなかった。残った土地は、僅か二畝になっていた。石炭運びの力仕事もしてみたが、もはや棄農して町へ出て働くより生きていく道は残されていない。彼は、以前兵隊に殴られた時親切にしてくれた友人杜烈を頼って離村する。

町へ出た大有は、人力車の車夫をして暮しをたてることになる。東北を侵略しつつある日本兵は、ここT島市においても傍若無人に跋扈している。そのような中国の現状を憂え、行く末を語りあう杜烈・杜英兒妹の話も、町へきたての頃の大有にはさっぱり理解できない。毎日毎晩汗だくになって街中を走りまわる車夫の暮しにはじめぬ大有は、

以前にもまして酒を飲むようになった。ある日、宋大傻に出会い彼の口から友人徐利が県の悪徳軍人の家に火をつけたという疑いで捕えられ処刑されようとしていること、陳大爺が兵隊に殴られて大怪我をしたことを知らされる。太有は、出来れば徐利を救いたいと村へ出掛けることにする。王のもとへ行った大有は、もはや徐利を救う手だてのないこと、そして已に陳大爺が亡くなったことを知る。陳大爺の葬式に参列し、T島市に戻った大有は、町で生きていくことを改めて決意する。杜烈兄妹とともに祝先生に会い、話を聞いたその日の晩、日本人が新聞社を打ち壊し、国民党の建物に火をつけるという事件が起る。丘の上から燃えさかる火を見ながら、杜烈と杜英は、火の手に向って、全中国を全世界を焼きつくせ、とつぶやくのだった。

《山雨》について纏まった批評を、恐らく最初に与えたのは茅盾であろうと思う。彼は一九三三年十月《文学》一卷六期に「東方未明」のペンネームで《山雨》についての書評を書いている。その中で《山雨》を、いくつかの欠陥を指摘しながらも、全体として、

「本書の北方農村の描写の大半は、賞賛に値すると思
う。今までのところ我々は、このような堅実な農村小説

を他にみたことがなかった。これは想像による概念的な作品ではなく、血が滴るような生活の記録である。農村の描写の大部分に、北方農村の立体図をみることができ
る。」

と、リアリズム作品として高い評価を与えている。更に、《中国新文学大系小説一集導言》においては、統照の作品群中における《山雨》の位置を次のように規定している。

「『発展』の過程において葉聖陶によく似ているのは王統照である。彼の初期の作品は、葉聖陶よりも一層『美』と『愛』を強調している。(中略)「春雨の夜」に収められて二十編の短編には、このような一種の『理想的』な基調が流れている。この理想の詩的境界から《山雨》のような現実的な人生認識に至るまでは、もちろん長い長い一筋の道である。この道の中間の一里塚が、ここに所録した《列車の中で》及び少し後の《攪天風雪夢牢騷》などであるが、その数は、さして多くない。彼の長編《一葉》と《黄昏》もこの『道』の中ほどに位置している」と云えよう。」

ここに述べられた、初期の作品「『愛』と『美』の理想的な境地を描いた作品から《山雨》のリアリズムへの発展という図式が、この後の《山雨》評価、王統照評価の共通

認識となる。

解放後最初の《山雨》論は、田仲濟《王統照小説のリアリズム精神》^②であった。彼は、ここでは茅盾の發展の図式を全面的に踏襲し、統照を基本的には批判的リアリズムの作家であると規定しながらも、「時代は詩人（統照を指す…広野）にヨーロッパの批判的リアリズムの高度で止まることを許さなかった。」としている。又、《山雨》については、「蔣光慈の革命小説や《子夜》と比べて、「革命の嵐や革命大衆の力の成長と苦闘を描く」という点においても足らないとしつつも、「現在においても我々は、この旧時代の中国農民の堅実さを描いた長編を継承していかなければなら」ず、従来「その内容にふさわしい評価を受けてこなかった」としている。

《山雨》についての最近の評論としては、呉松亭・周勣声《山雨》のリアリズムの成果試論^③がある。彼らは、《山雨》の独自性として、『文芸作品の社会的効用』をいう場合、普通は英雄人物を持ち出す手法をとるのに対して、平凡な人間を出している」点をあげ、その欠点として、「作家が革命闘争や民族解放戦争に直接参加していないことによって、作品に反映された現実生活に一定の限界がある。」ことをあげている。《山雨》の位置づけについて

は、茅盾の図式どおりである。

最後に、統照自身は、この作品について、

「大体の構想は、何度も練り直したし、題材の調整にもかなりの時間を費したのだが、書き終ってみるとやはり不満であった。とりわけ後半部の結末が慌しすぎたし、事実の描写が少なすぎ、時間が長く隔りすぎている。

五、六人の主要な人物を配し、彼ら各々の物語の發展があつて、一、二の主役に偏らないようにするつもりだったが、書いているうちにやり通せなくなり、従つて内容もはなはだ単調になつてしまつた。（中略）小説中の事實は、けつして誇張はない——私はまつたくなかないと思う。このような農村とそこにいる人々とは中国ではありふれており珍しくはない。私は誇大な刺激力をもつた言葉を用いていない。」^④

と、自己評価している。

以上の意見を総合してみるなら、作家王統照については、基本的に茅盾のたてた、「美」と「愛」の空想的世界から《山雨》のリアリズムへ發展したという図式に則つており、《山雨》の作品評価については、前半の農村の描写に高い評価を与えながらも、「現実」のとらえ方（陳大爺の描き方や農村の革命運動のとらえ方など）に限界がある

こと、構成上では後半部の書き込み不足などをあげている。

小論では、右の研究成果を踏まえつつ、自他ともにその瑕とする「後半部の慌しさ」が生じた原因を検討し、更に統照の他の長編作品との間にある、ある相違点を比較するというふたつの作業を通して、私なりの《山雨》の王統照作品中における位置づけと作品の性格づけを試みたい。

(II)

《山雨》の前半部と後半部、奚大有が離農する前と、T島市に移り住んでから後では、明らかに物語の密度に濃淡がある。極端な云い方をすれば、中断同様の終り方をしているとも云えよう。何故このようになったのであろうか。その理由として、以下の二点を考えてみた。

ひとつには、《山雨》一編において「異化（非日常化とも）оспарание^⑤」されているものが、他ならぬ「労働」そのものであるということにある。農民にとっての野良仕事（野良仕事）がそうであるように、一般に「労働」というものは、きわめて日常的なものであるがゆえに「習慣的」「自動的」に知覚される（従ってことさらに意識されない）のがふつうである。ロシアフォルマリズムの理論家の一人、ヴィクトル・シクロフスキーは、「自動化作用は、ものを、衣服を、

家具を、妻や戦争の恐怖をのみ込んでいくのである」というが、「仕事・労働」も「自動化作用」によって「のみ込まれていくもののひとつである。そこで「生活の感覚を取りもどし、ものを感じるために」^⑥は、ものを自動化の状態から引き出す手法、わざと知覚の過程に細工を施す手法（例えば婉曲に表現するとか、そのものの一般的な名称を用いないとか）が用いられるのである。

《山雨》には、しばしば「本分」とか「本等」という言葉がでてくる。一例をあげれば、第四章で大有が、「春に種を播き、秋に穫り入れ、照りつける日光を裸の肩や背にうけて高梁畑で土くれや雑草を鋤きかえず、これが百姓の本分の仕事（莊稼人的本分）だ」というようにである。このことは、野良仕事を「本分」という言葉に置き換えることによつて、いわばひとつの屈折を経ることによつて、ことさらに読み手に意識させることになっている。

又、第八章においては、春になって二人の「短工」ともに田を耕す大有の姿が仔細に描かれている。ある評者は、《山雨》の欠点として描写の冗長さをあげているが、この執拗な農耕の描写によつて、我々は中国の農民の日常の労働を意識することにもなるのである。

更には構成の上でも、借金や旱魃、怪我などによつて

「野良仕事」が奪われていく過程を克明に描き、石炭運びや人力車夫の仕事を対置することによって「野良仕事」の大有りとしての意味を浮かびあがらせ、際立たせる方法をとっている。

思うに、これらが王統照が《山雨》で用いた「異化」の用法だったのだ。とすれば、農民の「本分」である労働と、人力車夫としての労働とが、小説の前半と後半で対比されるという構造になっており、後者は前者を意識させるための手段にすぎないということになる。従って大有りに再び帰農でもさせぬ限り、もはやこのテーマを追求しつづけることは不可能なのである。かくして後半の幕は蒼惶として閉じられることになったのだ。

では、一編の構成上の破綻を出来せしめたがゆえに、このような試みが全く無くもがなのものであったのかと云えば、そうとはばかりは云えまい。それは、はからずも奚大有という一農民を通して人間における「労働」の意味を問うというきわめて射程の長いテーマを呈示することになったからである。例えば、道路工事に徴発された農民たちの、「昼過ぎの暖かさが、仕事をする者達にちょっとした慰めを与えた。天はまだ彼らのことを忘れていないとでもいっているかのようにだった。(中略)十一月の温かさが、

力強く活発な若い農民の心を挑撥したので、陽光の下で働く者たちは、しばらくは未来の困難を忘れた。」(第十六章)

というような姿に、ちょうどソルジェニツインの《イワン・デニソウヴィチの一日》にみられるような、「強制された労働が、思いがけず」「内発的労働に転化^⑧」するという、「労働」そのもののもつ、人間性の根源に深く結びついた性質をみることができる。労働というものが、「自己表現へと転化(ドイツ・イデオロギー)」しうるものであるとすれば、このテーマを内包していることが、実は《山雨》一編の独自性の証しになっており、今日なお作品としての生命を保ちつづけるひとつの所以となつているとも云うことができるのである。

次に、リアリティという側面から考てみよう。
《山雨》前半の農村生活の描写は、茅盾も認めるように、誠に美事な達成をみたのであった。作者自身も、私かに自ら許すところがあつたらしいことも先の引用で知れる。つまり作者は、前半における農民奚大有のリアリティに自信を持っていたということになる。当初の予定のうち「北方農村の崩壊現象とその原因を描く」という構想は一

応成功したわけである。では、「農民の目覚めを描く」という構想の方はどうなったのであろうか。

ここで因みに、二八年の魯彦の《黄金》と、三一年の丁玲《水》と、《山雨》というほぼ時代を同じくする三作品を並べてみたとする。

息子からの送金がとだえた如史夫妻をいじめぬきながら、最後にその息子が実は秘書主任に出世しており、両親に莫大な金を贈ったと知るや、掌を返したように卑屈な態度ですりよってくる《黄金》の陳四橋の世界とそこに住む人々は、我々には既に魯鎮（祝福）や未莊（阿Q正伝）のそれとしてなじみのあるものである。如史夫妻の暮しは、一波乱あった後は、又波乱の起る以前の静かさに戻っている。だが奚大有の生活は、二度と以前のものに戻りはしない。《山雨》の世界では已に昨日の生活を根こそぎにするような何かが日々進行しているのである。

「そのとき、彼らは、心から彼の指揮に従っていた。彼らの心はひとつになった。その命をみんなに捧げていた。彼らの心は、無限の光明に満ちていた。」

そして夜が次第に明けそめた頃には、この一隊の人々、この一隊の餓えた奴隷達は、男が先に立ち、女もそれについて駆け、生命のほとばしる雄叫びをあげなが

ら、水よりも凶暴に、町に向っておしよせていった。」

丁玲《水》

竹内好が云うように、《黄金》と比較すれば、この作品の新しさは決定的である。しかしながら、農民がひとつの群れとして描かれていること（それは新しさであるが）ひとつをとっても、その浪漫性、観念性もまたあきらかであろう。とすれば、三者を比較した時、一九三〇年前後の中国農民の姿を描いて最もリアリティを感じさせるのが、《山雨》であるというのが、私の見解である。

私の読んだ限りでは、大有の革命的農民としての決定的な覚醒はついに描かれていない。もちろん前出の呉・周論文のように、

「最後には、彼もきっぱりとこのように云えるまでになったのだ。『俺たちだって、他人に暴れ込まれて、いつもいつも手向いもせず、やりかえしもせずってえわけじやあるまい。』奚大有は、ついに現実の生活と労働者階級先進分子の教育の下、真に覚醒したのだ。彼が未来の革命闘争において、党の指導による労働階級の隊列にしっかりと加わるだろうことは疑う余地がない。」

という見方もある。しかし、ここに引かれた大有の言葉のみをとらえて、そのまま革命的農民としての覚醒の証しと

するのは、やや楽天的に過ぎるのではあるまいか。半植民地という独特の歴史的情況を背負っていた中国では、ナシ

ヨナリズムと革命が不即不離の形になつてゐたことは夙に指摘されることであるが、それゆえここでは早トチリは敵に戒められなければならないまい。百歩譲つて呉・周論文の主張を認めるとしても、その場合、覚醒の過程の記述が如何にも貧弱、というより過程はとばされて、ある日突然目覚めておりましたというに近いことになつてしまふ。何故このようなことになるかと云えば、つまりは統照にその過程を描いていく自信がなかつた、正確に云えばその部分のリアリティを作家として保証できなかったからと云うことになる。

思うに統照は、この作品のリアリティに自信を持ってゐたがゆえにT島市に出てからの大有の始末に困つたのである。根っからの農民である大有が、土から引き離されるという憂き目に遭つたのである以上、彼の意識が何らかの意味で変らなければウソになるだろう。しかし、「安分守己」な農民の典型のような大有を、安易に急進化させることは、つまり《水》の方向へ向うことは、統照のとらえた「現実」との緊張関係を崩し、リアリズム作品としての自律性を損うことになる。この二律背反に悩んだ末、結局奚

大有の変化への兆しを臭わせたまま中断するしかなかつたのではあるまいか。

(III)

統照は、その生涯に五編の長編を書いた。処女長編《葉》(一九二二年)は、青年知識人の魂の彷徨を描いた作品であるが、一編の末尾において、主人公李天根が、所謂「愛」と「美」の思想を独白するところなどから、一種の(思想的な)自伝的作品といえるかも知れない。

二作目の長編《黄昏》(一九二三年)では、封建地主の妾という境遇を抜けだそうとする二人の女性周瓊符、英哲の運命を描くことが主題といえようが、狂言回しとして、彼女達の逃亡を助ける知識青年趙慕璉が配されている。

この二編が、《山雨》に先行する長編である。《山雨》以後の長編としては、一九三六年出版の《春花》がある。この作品は、五四運動中に生まれた「黎明学会」に属していた青年達の様々に分岐していく人生を描こうとしたものである。特にひとりの主人公を定めることをせず、学生運動の熱心な参加者でありながら挫折し、剃髪して僧になる堅石をはじめ四人の青年を配してこの時代の知識青年の群像を描くことを試みている。

ここで問題にしたい《山雨》に先立つ二編の《山雨》と

の相違点は、《一葉》の李天根といい、《黄昏》の趙慕璉といい、濃淡はあっても、そこに作者自身の投影があるということがある。彼らが作者と同じ知識階級に属する人間という設定であるということもあるが、思想という内面的な面においてもそう云えるのである。いわば作者と彼らとは臍の緒がつながっているのであり、彼らは作者の思想の代弁者なのである。李天根の「回想の記録（回憶的記録）」なる日記、趙慕璉の日記や手紙、その中味が（《一葉》の場合には頻繁に、《黄昏》の場合には数ページにわたって）そのまま作品の中にとり入れられたり、主人公の演説めいた独白があったりするの、主人公の口をかりて、作者の観念（思想）を直接に表白していることに他ならぬ。これは、西欧近代のリアリズムの、現実のきりとり方、話の構成そのもの（プロット）が作者の思想をもの語るといふ方法ではなく、一種の「叙情」であって、この点でロマン主義の混入と云えよう。

それに対して、《山雨》では、このロマン主義の混入が一掃され、オーソドックスなリアリズムが成立している。言葉を換えていえば、「想像力に基づく農民小説」の成立とでも云えようか。ここに《山雨》一編の統照作品群中における独自の意味があったのである。

ところが、《山雨》に続く《春花》では、前述したように五四時代の知識青年が描かれている。さすがに、《一葉》のように作者の分身が、作者の思想を演説するようなことはなく、複数の登場人物に過不足なく比重を配分しているものの、五四時期を中国大学の学生として迎え、啓蒙雑誌《曙光》を刊行した統照自身の若き日の姿を（それが四人の青年に分散した形であれ）そこに発見することは、さほど難しいことではない。つまり、《山雨》でとられた、「想像力に基づく農民小説」という可能性は放棄されたのである。統照自身の主観的判断がどうであったかを確定できるような資料を、いまのところ私は持ちあわせていないが、ことこの点に関しては私には《一葉》《黄昏》の地点への逆戻りとしか思えない。以後、彼によって（中国革命の主体であった）農民という他者の内面へ踏み込んだ長編作品が書かれることはなかった。

山田昭夫氏は、有島武郎の処女作《カンカン虫》について次のように書いている。

「結局有島は作家生活に入って以後、自分が下層社会の人々になりましたような作品を書く気になれなかったのである。

（中略）

『カンカン虫』の有島の化身術は創作方法の過失ではない。有島の思考に即していえば、可及的に到達すべき創作方法であったので、有島はいわば逆に作家生活を出発してしまつたのである。『カンカン虫』の方法を完全に過失視したところに、有島の晩年の悲劇があつた。^④

王統照が、有島がそうであつたように、『山雨』の方法を「過失視」したというふうなことがあつたのかどうか、くり返すようだがいまのところ何とも云えない。「當時にあって多くの人の重視するところとならず、その内容にふさわしい評価を受けてこなかつた」という田仲濟氏の言を考へあわせれば、あるいは、「過失視」に近い自己評価を与えていたかも知れぬ。少なくとも、『山雨』の方法が、統照自身によつて(も)、ひとつの可能性とは考えられておらず、過渡的なものと考えられていた、ということは云えそうである。

以後の中国の農民小説の主流が、『山雨』的な作品ではなく、『水』的な作品であつたという事実は、右のことの証しとも、あるいは帰結とも云えよう。

(IV)

文学革命、五四運動の影響を最も強く受け、二十年代初めに作品を発表し始めた中国の知識人にとって、絶え間な

い内戦と外国(日本)の侵略という情況下において、彼が作家としての良心と想像力と観察眼を備えていれば、いはば社会の底辺にいきる人々の生活に関心に向うのは当然のなりゆきであつたであらう。王統照の場合でいえば、作家生活の出発から一貫して、社会の矛盾を一身に体现している人々を、又理想と現実の乖離に悩む知識人を描いた作品を書きつづけている。だが、二十年代末の左翼文学の興隆は、彼に大きな転換を迫つたのであつた。ここで生じた問題は、魯迅と革命文学派との論争、日本の有島と広津・片上との《宣言ひとつ》論争にみられるように、ほとんど文学の根源にかかわるものであつた。私には、この問題をここでとりあげて論ずる余裕も力もないので、統照が実作において示した打開(転換)への試みが『山雨』であつたことを指摘するにとどめる。

すでに(II)(III)で見てきたように、『山雨』は、「リアリズム」^⑤の規矩に極めて忠実たらんと意図された作品であつた。そのことによつて我々は、作者王統照の「リアリズム」受容、「リアリズム」理解の如何なるものであつたかを窺い知ることのできるのである。と同時に、文学の政治への接近、融合という時代の趨勢に対して、リアリズム作家としての彼が示し得た懸命の対応であり、結果的には可

能性の芽として、評価できるものを含んでもいたのであった。

しかし、それは結局過渡的な「批判的リアリズム」であるとして顧られることはなかった。イリヤ・エレンブルグは、「人類の未来のための社会主義と、現実を眺めるリアリズムとは、矛盾概念であり」、「資本主義リアリズム」と「社会主義ロマンチズム」しか成立しえない、と云ったそうであるが、中国の現代文学に所謂「リアリズム」が、リアリズムとロマンチズムの混合物であることは、ことあらためて《文芸講話》やら解放後の「結合」理論やらを持ち出すまでもあるまい。《山雨》に対する評価の低さも決して不思議なことではない。

しかしながら、四人組後の中国で、《人妖の間》のようなルポルタージュや、白樺・王蒙・劉心武といった人々の作品が生み出され、(被治者の間では)大いに好評をもって受け入れられた事実を見聞するにつけ、《山雨》が、二十年代の知識人出身作家の、その後たどるべきひとつの方向でありえたのではないか、という気持が起るのを禁じ得ない。《山雨》のもつこの問題性こそ、「労働」の農民(人間)にとつての意味という遠大なテーマと相俟って、今日なお《山雨》を読みつがせる原動力になっているのではあ

るまいか。

以上が、私が王統照の《山雨》から読みえたことがらであり、また今後も彼および彼の作品にかかわっていく上での課題である。

注

①《山雨》初版は、国民党中央図書雜誌審査委員会に、階級闘争を宣伝するものと認定され、その後二四章から二八章までを削除して刑行された。従って初版本は極めて少数しか流布していない(唐弢《晦庵書話》)。小論においては、一九五五年二月人民文学出版を用い、章数もこれによっている。

②原題…王統照小説的現実主義精神 《文学評論集》山東人民出版社一九八〇年

③原題…試論《山雨》的現実主義成就 《文学評論叢刊》第八号 一九八一年三月

④山雨跋

⑤異化とは日常見なれたもの、そのために自明にみえるものを、目だたせ、異常なものにみせる芸術手法、知っているつもり的事柄を、本当に認識するための弁証法的過程といつてよい(文芸用語の基礎知識 至文堂一九七九年)。異化という訳語は、《ロシア・フォルムリズム論集——詩的言語の分析》新谷敬三郎・磯谷孝の訳、非日常化という訳語は、《20世紀評論集批評のよるこび》水野忠夫の訳である。

⑥ヴィクトル・シクロフスキー《手法としての芸術》《ロシア・

フォルマリズム論集——詩的言語の分析》現代思潮社一九七一年所収

⑦《中国現代文学史》九院校編寫組 江蘇人民出版社一九七九年 蘇雪林《二三十年代作家与作品》広東出版社一九七九年

⑧江川卓；講談社文庫《イワン・デニーソヴッチの一日ほか二編》解説

⑨中国の革命と文学第五卷解説 平凡社一九七二年

⑩《山雨》を大有の人間の成長という側面から見れば、教養小説とも読める。しかし、倪煥之がそうであったように、大有も作品世界で無理なく（リアリティを損うことなく）その「個（自我）」を發展させてゆくことは、中国の社会環境が許さなかったであろう。

柴内秀司《葉聖陶——へ一生》から《倪煥之》へ》東京都立大学修士論文一九八〇年参照

⑪《春花》と《秋実》を一編の上下として考えた。尚五編の中には、抗日戦中《万象》上に連載された《双清》を含んでいる。この作品は王統照文集第三巻に収められている模様であるが、筆者は未見である。王統照文集第一巻解説によれば、妓女の姉妹を扱ったものようである。

⑫そのこと自体は、格別珍しいことではなく、この時代（二十年代）の作品（例えば、葉聖陶の《隔膜》に収められた諸作品）ではむしろ一般的ともいえる手法である。

⑬中村光夫《日本の近代小説》岩波新書一九五四年参照

⑭ここでは、ロマン・ヤコブソンが《芸術に於けるリアリズムに

ついて》（《ロシア・フォルム文学論集1》）せりか書房、一九八二年所収）の中で、リアリズムの定義のひとつとしてあげた、「十九世紀の特定の芸術派の弁別的特徴の総和」という意味で使った。

⑮ここでいう「想像力」が、現実への観察を放棄したイメージョンではなく、文学的創造に不可欠な能動的性格をもったものであることはいうまでもない。

⑯山田昭夫《有島武郎・姿勢と軌跡》右文書院一九七六年

⑰中村真一郎《小説の方法——私と「二十世紀小説」——》集英社一九八一年

王統照著作年譜

一八九七年一月八日（旧暦） 山東省諸城県相州鎮の地主の家庭に生まれる。七歳の時父と死別。

一九一三年 済南の省立一中（育英中学とも）に学ぶ。中学在学中に、章回小説《劍花痕》を書き、《遺髪》なる作品を《婦女雜誌》へ投稿、掲載される。以後《小説月報》にも投稿。

一九一八年 中国大学入学

一九一九年十一月 鄭振鐸・耿濟之・瞿菊農らと雑誌《曙光》を発刊

一九二一年 一月四日北京中央公園来今雨軒での文学研究会結成大会に出席。五月《文学周刊》発刊に際しその編集者となる。

- 一九二二年 長編《一葉》商務印書館より刊行
- 一九二三年 第一短編集《春雨之夜》商務印書館より刊行。六月孫伏園とともに《晨報》副刊《文学旬刊》の編集主任となる。一月から六月まで《小説月報》十四卷一期〜六期に《黄昏》を連載（一九二九年商務印書館より発刊）
- 一九二五年 戯曲《死后的勝利》商務印書館より刊行。
- 一九二七年 青島に移り住む。日本へ旅行。
- 一九二八年 短編集《号声》刊行。
- 一九二九年 短編集《霜痕》華東圖書公司より刊行
- 一九三〇年 東北各地を旅行。その折の紀行文集《北国之春》
- 一九三三年 上海神州国光社より発行。
- 一九三三年 《山雨》刊行 詩集《這時代》刊行。
- 一九三四年 散文集《片雲集》を生活書店より刊行。《山雨》を書いたことにより当局のブラックリストに載ったため欧州へ赴く。イタリヤ・イギリス等歴訪。
- 一九三五年 帰国。詩集《夜行集》刊行。七月〜十二月《文学》に《秋実》を連載（帰国後、暨南大学、山東大学の教壇に立つ）
- 一九三六年 春、傅東華にかわって開明書店の雑誌《文学》を編集。《春花》を良友圖書公司より刊行。詩集《放歌集》刊行。
- 散文集《青紗帳》を文学出版社より刊行
- 一九三八年 詩集《横吹集》刊行
- 一九三九年 詩集《繁辞集》を世界書局より刊行。散文集《歐游散記》を開明書店より刊行

- 一九四〇年 詩集《江南曲》を文化生活社より刊行
- 一九四一年 短編集《銀電集》《華亭鶴》を文化生活出版社より刊行。訳詩集《題石集》を自費出版。
- 一九四八年 青島に帰り、山东大学教授、山東省文化局長など歴任。

一九五七年 論文集《炉辺文談》を山東人民出版社より刊行。
《王統照短編小説選集》を人民文学出版社より刊行。各短編集より二四編を選録。

十一月二九日午前五時山東医学院付属病院にて永眠

一九五八年 詩集《鵲華小集》、《王統照詩選》（人民文学出版社）刊行。

一九八〇年 《王統照文集》全六卷山東人民出版社の刊行開始。

王統照主要著作目録

《春雨之夜》 雪后・沈思・鞭痕・遺音・春雨之夜・月影・伴死人
的一夜・醉后・一欄之隔・警鐘守・山側之道・微笑・自然・十五年後・在劇場中・湖畔児語・鐘声・雨夕・寒会之后・技芸
以上二十編所収

《号声》 車中・鬼影・司令・攪天風雪夢牢騷・詭易・沈船・号声・印空・買木柴之一日・海浴之后・訥尔遜的一課 以上十一編所収

《霜痕》 青松之下・霜痕・冲突・生与一行列・旅舎夜話・相識者
河沿の秋夜・紀夢 以上八編所収

《銀電集》 一天天・水夫阿三・刀柄・隔絶陽曦・旗手・五十元・

父子・銀鼈的翻身・站長・游離・小紅燈籠的夢 以上十一編

《華亭鶴》 母愛・淚與翼・新生・華亭鶴 以上四編

この他文集第二卷に集外作品として左の十一編を収める。

湖中の夜月・夜談・星光・“前穿后補”・火城・灰背大衣・狗矢

浴・“小天分人”的生与死・属于春的？・射心人・打醮的故事―

伝説的故事之一